日蓮大聖人御書全集

しょうじいちだいじけつみゃくしょう

生死一大事血脈抄

新版
1774
〜
1777

生死一大事血脈抄

文永9年('72) 2月11日 51歳 最蓮房日蓮これを記す。

御状委細披見せしめ候い畢わんぬ。

夫れ、生死一大事の血脈とは、いわゆる妙法蓮華経これなり。その故は、釈迦・多宝の二仏、宝塔の中にして上行菩薩に譲り給いて、この妙法蓮華経の五字、過去遠々劫より已来、寸時も離れざる血脈なり。

妙は死、法は生なり。この生死の二法が十界の当体な

り。またこれを当体蓮華とも云うなり。天台云わく「当に知るべし、依正の因果はことごとくこれ蓮華の法なり」云々。この釈に依正と云うは、生死なり。生死これ有れば、因果また蓮華の法なること明らけし。伝教大師云わく「生死の二法は一心の妙用、有無の二道は本覚の真徳」文。天地・陰陽、日月・五星、地獄乃至仏果、生死の二法にあらずということなし。かくのごとく、生死もただ妙法蓮華経の生死なり。天台、止観に云わく「起はこれ法性の起、滅はこれ法性の滅なり」云々。釈迦・多宝の二仏も生死の二法

なり。

しかれば、久遠実成の釈尊と皆成仏道の法華経と我ら衆生との三つ全く差別無しと解って妙法蓮華経と唱え奉るところを、生死一大事の血脈とはいうなり。このこと、ただ日蓮が弟子檀那等の肝要なり。法華経を持つとは、これなり。

詮ずるところ、臨終只今にありと解って信心を致して南無妙法蓮華経と唱うる人を、「この人は命終して、千仏の手を授け、恐怖せず、悪趣に堕ちざらしめたもうことを為」

と説かれて候。悦ばしいかな、一仏二仏にあらず、百仏二百仏にあらず、千仏まで来迎し、手を取り給わんこと、歓喜の感涙押さえ難し。法華不信の者は「その人は命終して、阿鼻獄に入らん」と説かれたれば、定めて獄卒迎えに来って手をや取り候わんずらん。浅まし、浅まし。十王は裁断し、俱生神は呵責せんか。今、日蓮が弟子檀那等、南無妙法蓮華経と唱えんほどの者は、千仏の手を授け給わんこと、譬えば瓜・夕顔の手を出だすがごとくと思しめせ。

過去に法華経の結縁強盛なる故に、現在にこの経を受持

す。未来に仏果を成就せんこと疑いあるべからず。過去の生死、現在の生死、未来の生死、三世の生死に法華経を離れ切れざるを、法華の血脈相承とは云うなり。謗法不信の者は、「即ち一切世間の仏種を断ぜん」とて、仏に成るべき種子を断絶するが故に、生死一大事の血脈これ無きなり。

総じて、日蓮が弟子檀那等、自他・彼此の心なく、水魚の思いを成して、異体同心にして南無妙法蓮華経と唱え奉るところを、生死一大事の血脈とは云うなり。しかも、今、日蓮が弘通するところの所詮これなり。もししからば、広宣流布

の大願も叶うべきものか。あまつさえ、日蓮が弟子の中に異体異心の者これ有らば、例せば、城者として城を破るがごとし。

日本国の一切衆生に法華経を信ぜしめて、仏に成る血脈を継がしめんとするに、還って日蓮を種々の難に合わせ、結句この島まで流罪す。

しかるに、貴辺、日蓮に随順し、また難に値い給うこと、心中思い遣られて痛ましく候ぞ。金は大火にも焼けず、大水にも漂わず、朽ちず。鉄は水火共に堪えず。賢人は金

のごとく、愚人は鉄のごとし。貴辺あに真金にあらずや。法華経の金を持つ故か。経に云わく「衆山の中に須弥山はこれ第一なり。この法華経もまたかくのごとし」。また云わく「火も焼くこと能わず、水も漂わすこと能わず」云々。

過去の宿縁追い来って、今度日蓮が弟子と成り給うか。釈迦・多宝こそ御存知候らめ。「在々諸仏土、常与師俱生（いたるところの諸仏の土に、常に師とともに生ず）」、よも虚事候わじ。

殊に生死一大事の血脈相承の御尋ね、先代未聞のこと

なり。貴し、貴し。この文に委悉なり。能く能く心得させ給え。ただ南無妙法蓮華経釈迦多宝上行菩薩血脈相承と修行し給え。

火は焼き照らすをもって行となし、水は垢穢を浄むるをもって行となし、風は塵埃を払うをもって行となし、また人畜・草木のために魂となるをもって行となし、大地は草木を生ずるをもって行となし、天は潤すをもって行となす。

妙法蓮華経の五字もまたかくのごとし。本化地涌の利益

これなり。上行菩薩、末法今の時、この法門を弘めんがために御出現これ有るべき由、経文には見え候えども、いかんが候やらん、上行菩薩出現すとやせん、出現せずとやせん、日蓮まずほぼ弘め候なり。

相構えて相構えて、強盛の大信力を致して、南無妙法蓮華経臨終正念と祈念し給え。生死一大事の血脈、これより外に全く求むることなかれ。煩悩即菩提・生死即涅槃とは、これなり。**信心の血脈なくんば、法華経を持つとも無益なり。**委細の旨、またまた申すべく候。恐々

謹言。（きんげん）

文永九年壬申二月十一日（ぶんえいくねんみずのえさるにがつじゅういちにち）

桑門日蓮（そうもんにちれん）　花押（かおう）

最蓮房上人御返事（さいれんぼうしょうにんごへんじ）